

過去の地震から知る、未来の備え ～食べ物が人々に与えるチカラとは？

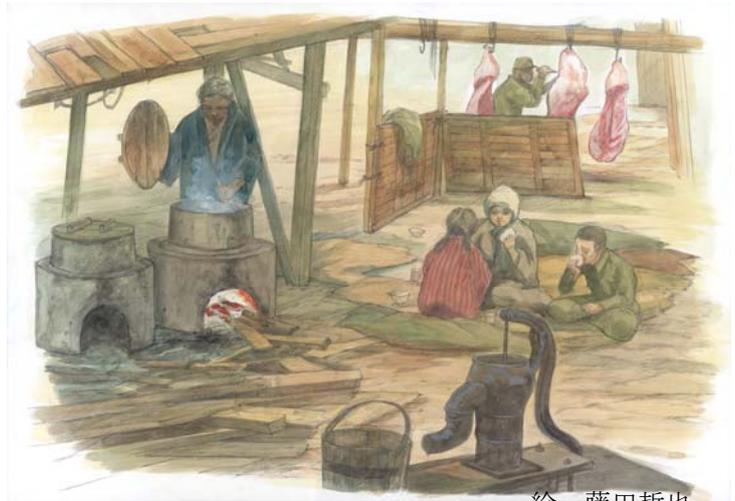
名古屋大学災害対策室 木村玲欧

未来の地震にそなえるためには、過去の地震を知ることが大切。1945年にこの地域で2,306人の死者を出した「三河地震」から、未来の備えにつながる教訓を考えていきます。

■外にかまどを作り、近所の人たちと一緒に炊事した。農家なので食料があり、井戸も残ったので水と食事には不自由しなかった。(明治村和泉集落(安城市和泉町)・鈴木敏枝さん・沓名美代さん)

周囲の家はほとんどみんな倒れて、炊事ができなくなったね。ほいで、外で近所の人たちと一緒に当番でご飯を炊いて、おにぎりを2個ずつくれるだね。あれは美味しかった。こんなこと言うのも変だけど、子ども心にも楽しかった。

農家だから食べ物には困らなかったし、井戸が外にあったから水も困らなかったね。



絵 藤田哲也

防災備蓄品として「水と食べ物」は必ずでできます。公的な支援がやってくるまでの2～3日間は、水も食べ物も自助でまかなえるような体制を取っておくことは重要です。「うちは井戸があるから大丈夫！」というお宅はご注意ください。三河地震では多くの井戸が潰れて使えなくなりました。

水ならば、生命維持のためには最低でも1人1日1リットルが必要です。普段からペットボトルの水を買っているお宅ならば、日ごろから「少し多めに」買いだめしておけばそれで大丈夫です。普通のペットボトルの水でも賞味期限は数年あります。特別な水を買う必要はありません。

ところが食べ物の備えになると、固い乾パン、よくわからない缶詰、サバイバル用の固形食料など不思議なものが「防災備蓄品」として幅を利かせます。しかし、「高齢者は固い乾パンを食べられなかった」「単調な味で食べるのが苦痛だった」、そして「あんな大変な状況のときに、そんなおかしなもの食べていたら、逆に気が変になってしまう！」「暖かいみそ汁を飲んだときに、体と心がようやくほっと一息ついたのがわかった」というのが被災者の本音です。暖かい食事は、生命を維持するだけではありません。心も休めて、長く続く災害と闘っていくためのチカラにもなるのです。

そのためには、レトルト食品や食べ慣れた缶詰、カセットコンロのガスボンベを少し多めに買いだめすることで最小限の対応は可能です。特に高齢者には、レトルトのおかゆも好評です。また地域で炊き出しの資機材をそろえて訓練することは、いのちを守るだけではなく、「災害後の生活リズムを守っていく」ためにも大切な備えなのです。阪神・淡路大震災では、震災当日、冷蔵庫のものを取り出して、屋外でバーベキューをした家族が多くありました。被災地の外からは「何てことを！不謹慎だ！」と怒りました。しかしそれは、まぎれもない災害を乗り越えるための行動だったのです。